

シンポジウム１：これからの認知症ケアと在宅医療

演題名	地域包括支援センターを医療面から支援するための「高齢者あんしんセンターサポート医」事業を構築した北区の取り組み
-----	---

概要

東京都北区は、高齢化率が２３区中１番であり、ひとりぐらし高齢世帯や高齢夫婦世帯等も増えている現状がある。介護力不足や相談までつながらない高齢者の増加が見込まれている。また、７５歳以上高齢者が、６５歳～７４歳の人口を上回りはじめ、疾患管理の必要性や認知症高齢者の増加も予測されている。

そのような状況下、平成１７年度より「認知症高齢者への総合支援策検討プロジェクト」としてまとめ、「認知症になっても安心して住み続けられるまちづくり」を目標とし、３つの安心の視点で総合的な支援の事業展開が始まった。

また、「長生きするなら北区が一番」を区の目標と掲げており、平成２３年度には、「長生きするなら北区が一番専門研究会」を立ち上げ、高齢者の課題を整理した中で、「介護と医療の連携による地域包括ケアの推進事業」で、「地域包括支援センターサポート医」の配置と「在宅介護医療連携推進会議」の設置の提案がなされた。

平成２４年度より、高齢者あんしんセンター（地域包括支援センターの愛称）サポート医事業を開始した。

王子・赤羽・滝野川の３圏域に分け、各１名ずつ北区医師会の協力を得て、「認知症サポート医」で在宅診療をしている医師を配置した。医療相談・訪問相談含め、認知症の疑われる事例が多くあり、在宅で住み続けるために、介護・高齢福祉サービス、医療への確に、迅速につなげていく対応を行っている。

また、在宅介護医療連携推進会議では、介護・医療の連携を進めるためのしくみづくりについての方向性の課題整理を行った。

地域包括ケアシステムでも、横断的な課題として認知症ははずせない。「在宅介護医療連携推進会議」の部会に「認知症疾患医療・介護推進部会」を設置して課題の整理に入ったところである。